

●——昼休み

昼休みに入るとマリは、お弁当を持って放送室へと向かった。放送室には1年生の後輩が先に来ていて、準備をしている。

「こんにちは」

マリは後輩たちと挨拶をすると、CDプレイヤーの前に立った。

「これを流したらサトミと明智くんは……」

ためらいながらもサトミから受け取ったCDをプレイヤーに挿入すると、マリは再生ボタンを押した。POPで切ないラブソングが校内に流れ始めた――。

芝生の上でC組の友達とランチをしている那須シズカ。

教室で弁当を食べながら参考書を開く石田ダイキチ。

アニメ雑誌を見て友達と語りあう平賀ゲンキ。

食堂で飯を大食いしている前田ケンジ。

友達とグラウンドでサッカーをしている上田ヒロユキ。

上杉アキラに頼んでアクロバティックな投稿用の動画を撮らせている服部とその後輩たち。

職員室で大岡先生と楽しそうに話をしている北条マサミ。

黒板にチョークで何かのシンボルを描きながら、真剣に語り合う竹中ミキオと木下フジコ。

ラブソングの曲に合わせて音楽室でサククスを吹く大谷ヒデミ。

そして、友達からのランチの誘いを「ゴメンね」と断り、屋上への階段を走る南総サトミ。屋上には購買部で買ったパンを食べ終え、耳にイヤホンをしたまま寝そべる明智ヒカルがいる。

マリは表面上は楽しそうに部員たちと弁当を食べるふりをしながら、1階の放送室からわずかに見える屋上の様子をずっとうかがっていた。

ドアを開けて屋上に上がって来たサトミが、ゆっくりと明智に歩み寄る。空を眺めていた明智の視界に、サトミのスラリとした両脚が入り、明智がゆっくりと身を起こす。

サトミがかわいい装飾の手紙を差し出した。

「何？」

明智の口がそう動く。耳にはまだイヤホンをしたままだ。

「好きです！ よかったら付き合ってください！」

サトミは勇気をふりしぼり、明智に告白した。

放送室のマリは胸に手をやり、不安気にその様子を見つめていた。ほとんど弁当は手つかずのままに。

明智が耳にしたイヤホンを外すと、その動作に同調したかのように校内で流れる曲も突然、途切れた。その時――学校のすぐ真上を軍用のC1輸送機が轟音とともに飛び去った。

明智がイヤホンを外したのはサトミのためではなく、この大型輸送機が学校めがけて飛んできているのに反応したためだった。

「キヤッ！」

サトミは飛行機の轟音と、それが引き起こす突風に態勢を崩され、明智の胸に倒れ込んだ。とっさに倒れかかったサトミの両肩を抱いた明智。

グラウンド場でサッカーをしていた上田たちも空を見上げている。上杉はアクロバティックなジャンプを決めようとする服部より、上空の輸送機にスマホのカメラレンズを向けた。

教室にいた生徒たちも、轟音の正体を突き止めようと窓側に詰めかける。

一方、マリは輸送機よりも、ふたりが抱擁する姿にショックを受けていた。明智が抱きつくサトミをやや強引に離すと、「イヤッ」とサトミは短く悲鳴を上げた。飛んで行った輸送機の行方を見るため、明智はフェンスの方へと駆け寄る。

輸送機はややロールアウト気味に不安定な感じで飛行していて、よく見ると後部のカーゴハッチが開いている。輸送機が街の中心部上空に差し掛かった時、機体がふたたび左右に揺れ、その拍子にカーゴベイから何か黒い四角いコンテナのような物が、人影とともに街へと落下して行った。落下して行ったコンテナは備八市民病院の辺りに落ちたように見えた。

そのまま輸送機は、沿海部平野に位置する人口200万人を超える政令指定都市の名古山市方面へ飛んで行き、山際ぎりぎりの高度で飛行を続けた後、山陰に消えていった。

「な、何だったの？」

サトミが震える手で、呆然とした様子で輸送機を見届けている明智の腕を掴んだ。

「何か落としていった。爆弾じゃないみたいだ。あの輸送機、墜落したか……」

山の彼方を見つめたまま明智は、無意識にサトミの震える手を握り返していた。

まもなく一筋の煙が街から立ち上がり始めると、消防車やパトカー、救急車のサイレンがそこから鳴り響きだした。

2万人近くが住む、この小さな街に何かが始まろうとしていた――。